Short Stories (III)

William Faulkner

フォークナー全集

26

江苏工业学院图书馆
藏书章

冨山房

© Arimichi Makino, Takaki Hiraishi 1997
Printed in Japan

ISBN 4-572-00826-4 C0397

フォークナー全集 26
短篇集（Ⅲ）
牧野有通・平石貴樹 訳

一九九七年十月二十八日 第一刷発行
発行者 坂本起一
発行所 冨山房
東京都千代田区神田神保町一丁目三番地（〒一〇一）
電話（〇三）三二九一二二七一（代）
振替〇〇一五〇-七-五四五二九
印刷 内外印刷株式会社
製本 富士製本株式会社
（落丁・乱丁本はお取り替えいたします）

短篇集

(三)

牧野有通
平石貴樹
共訳

UNCOLLECTED STORIES OF WILLIAM FAULKNER
Edited by Joseph Blotner
Copyright © 1979 by Jill Faulkner Summers
© 1979 by Random House, Inc.
Japanese translation rights arranged with Random House, Inc.
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

FATHER ABRAHAM
© 1984 by William Faulkner
Japanese anthology rights arranged with American Play, Company, New York
through Tuttle-Mori Agercy, Inc., Tokyo

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

目次

青春……平石貴樹訳 7
アル・ジャクソン……平石貴樹訳 28
伊達男（ドン・ジョヴァンニ）……平石貴樹訳 36
ピーター……平石貴樹訳 49
月光……平石貴樹訳 57
親分……牧野有通訳 69
退屈な話……牧野有通訳 100
帰還……牧野有通訳 129

物騒な男……牧野　有通　訳　171
エヴァンジェリン……牧野　有通　訳　182
エルマーの肖像……平石　貴樹　訳　216
警戒緊急指令……平石　貴樹　訳　260
雪……平石　貴樹　訳　291
父なるアブラハム……牧野　有通　訳　308
訳者解説……牧野　有通　363
平石　貴樹　373
フォークナーの時間と語り……池澤　夏樹　381

装丁　笠原須磨生

短篇集

㈢

青春

I

彼女はこの近隣出身の人ではなかった。運命の盲目の差配と、さらに盲目な郡の教育委員会の差配に押しこめられて、雨に穿たれた丘と松と肥えた河ぞいの低地からなるこの土地に、彼女は人生の最後の日まで、余所者として留まりつづけることになったのだ。本来なら彼女の環境は、かすかに感傷的な頽廃趣味、お茶の儀式とか、優雅であまり意味のない活動に囲まれた上流の寛ぎといった環境であるべきだった。

彼女はとても大きな黒い目をした小さな女性で、ジョー・バンデンの文字どおり乱暴な求婚を、長老派的な抑制という自身の内面を守りぬくための外枠として好都合な、見せかけの愛情関係として受け入れるような人だった。結婚生活の最初の十か月、それは今まで経験したこともない重労働の日々だったが、それでも彼女の思い込みを打ち破ることはできなかった。彼女の精神力は、生まれてくる子供に今では投影されて彼女を支えていた。彼女は双生児が生まれてロミオとジュリエットと名づけることを望んだが、実際にはジュリエットひとりに、その満たされぬ愛を注ぎこまざるをえなくなった。夫は磊落に大笑いしてこのジュリエットという命名を許した。父親としての責任感はこの男にはほとんどなかった。こういう種類の男がたいていそうであるように、夫はどうしても子供が生まれてしまうという事実を、結婚生活上の避けがたい障害の一つであり、釣りをしている時に足を水に濡らす危険のようなものだと考えていた。

その後規則正しく続いて、シリルが生まれ、のちに州議会議員になり、それからジェフ・デイヴィスが生まれ、最後に

はテキサスで馬を盗んで縛り首になった。その下はまた男の子で、母親はひどくがっかりして名前をつけるほどの関心も持たず、とりあえず便宜上、子供を意味するバッドという語で呼ばれて返事をするようになり、のちに中西部の小さな大学でラテン語の教授を務め、激しい情熱のローマ詩人カトゥルスをとりわけ好むことになった。最後の五番目の子は、結婚後四年と七か月で生まれたが、彼女はこの出来事のあと、幸運にも健康を回復せず、するとジョー・バンデンは、珍しく感傷的な悔悟の気持ちを発揮して、この末の息子に自分で名を与え、それから再婚した。二番目の妻は背が高く骨張った気丈の女だったが、因果応報の使者のような役割を果たし、時にはストーブにくべる薪で夫を激しく打ちすえることが知れわたるようになった。

この後妻による新体制の最初の公式活動は、ジュリエットという名を廃止することで、彼女はジュールと呼ばれることになり、ジュリエットと継母は、一目見た時からもともと本能的な反感がくすぶっていたのだが、その日からはおおっぴらに互いを憎みあうようになった。だが事態が猶予ならなくなったのは、それから二年後のことだった。七歳のジュリエットは妖精のような娘で、葦のように痩せ、木の実のように褐色で、細い目は玩具の動物の目のように黒くて深みがなく、日に焼けた黒い髪はてんでに乱れていた。血の巡りの悪い弟たちを平等にたたきまわり、両親を驚くべき流暢さで罵倒するお転婆娘だった。ジョー・バンデンは、定期的に酔って涙もろくなると、家族の崩壊を泣いて嘆き、継母にもっと親切にしてやれと娘に訴えた。それでもふたりの不仲は我慢できなくなり、とうとう曲がりなりにも平和を取り戻すために、父親はジュリエットを自分の母親のもとに預けざるをえなくなった。

この新しい環境では何もかもが違い、既存の体制にたいする彼女の挑戦と反抗は、うろたえた喧嘩腰程度のものとなり、さらにしばらくすると、感情的な締めつけが何もないという、消極的な意味の満足感に変わった。ここでも家の中や菜園で、しなければならない仕事はやはりあったが、ふたりして仲良

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

く暮らしていけるのだった。今や性という面倒な人間区分を超越した祖母は、賢く、ジュリエットをそっと上手に監督したので、ふたりの間には摩擦がまったく生じなかった。ジュリエットはとうとう邪魔されずに、望んでいた落ち着きと独立を手に入れることができた。

以前彼女が台風の目だった、もとの家族の者たちは、もし会えば彼女を見違えたことだろう。以前の生活が動物的な親への愛を彼女からすべて奪い去ったのと同じように、重要な時期に起こったこの環境の変化は、激しく感じやすい誇りや、むら気や喧嘩っぱやさを彼女から奪い去った。ただし、父親や弟たちのことを耳にするだけで、かつて抑制のきかなかった彼女の反逆の心はたちまち目覚めた。それは今眠っているのだが、相変わらずの爆発力を秘めていた。

十二歳になっても彼女は変わらなかった。背が高くおとなしくはなったかもしれないが、まだ褐色で痩せて猫のように活発なままだった。色あせたギンガムの服を着て帽子はかぶらず、足は裸足か不格好に壊れた靴をはいて、家に時々立ち寄る余所者たちには内気でぎごちなく、たまに郡役場のある町へ出かける時には、帽子と靴下が窮屈そうだった。父親と弟たちを、彼女は鋭い動物のような直観をもって避けとおした。彼女は男の子よりも速く上手に木に登ることができたし、川の茶色の淵だまりでは、真裸に輝いて何時間も過ごした。夕べにはポーチの縁から足を垂らしてすわり、祖母は戸口で自家製の煙草に火をつけ、香りが穏やかな黄昏を満たした。

II

するべき仕事と、まだふくらみのない身体に包まれた誇り、木登りと水泳と眠りからなる、それは幸福な時期だった。さらに幸福だったのは、十三歳の夏になって、彼女にも仲間ができたことだ。自分ひとりの川淵でゆったり泳いでいる時に、その男の子を見つけたのだった。音がして見上げるとその子がいて、色あせたつなぎの服を着て、土手から彼女を見守っていた。前にも一度か二度余所者が、彼女が飛び込む音を聞

きつけて、下生えの茂みを掻き分けてのぞくことはあった。黙って見守っている限りでは、挑戦的な無関心で彼女はそれに応えていたが、相手が彼女と話そうとすると、熱い憎しみを次第に高めつつ水から上がり、わずかばかりの衣服を掻き集めた。

今度は自分と同じ年頃の男の子で、袖のないシャツを着て、櫛を入れたことのない堅い髪に日ざしが当たり、彼女をじっと見つめたままだったから、彼女のほうは邪魔されたわけじゃないんだ、という思いさえ浮かんでこないほど自然だった。男の子は彼女のゆっくりした泳ぎを、嫌らしくない穏やかな田舎者めいた好奇心でしばらく眺めていたが、やがて冷たく茶色い水しぶきの魅力には勝てなくなった。

「くそっ」とかれは言った。「おれも入れてくれよ」

ゆったりと浮かんだまま彼女は返事をしなかったが、かれのほうは返事など待っていなかった。いく度か簡単な動作をすると、かれはその見すぼらしい衣服をはぎ取った。肌の色は古紙のようだった。かれは川に突き出した枝に登っていった。「いいか、見てろよ」とかれは叫び、不格好に身をよじらせてから、えいっと飛び込んで淵だまりに派手な水しぶきを上げた。

「そんなの飛び込みじゃないよ」かれがバシャバシャと水面に現れると彼女は穏やかに言った。

「教えたげるわ」そしてかれが水に浮かんで見守るうちに、彼女は同じ枝に登り、少しの間あぶなっかしげに真直ぐに立った。平たい輝く身体はかれの身体の複製のようだった。彼女は飛んだ。

「くそっ、やったな、おれもやってみるぞ」一時間の間、ふたりは交代で飛び込みをした。やがて疲れて頭がくらくらして、ふたりは川が浅くなるところまで流れに乗って流されていき、熱い砂地に横になった。かれはリーという名だと言った。「川むこうから来たのさ」ふたりは黙ったまま、仲間として横たわり、最後には眠り込み、空腹で目を覚ました。「スモモでも食おうぜ」とかれは提案し、淵だまりへ戻って服を着た。

Ⅲ

この幸福な一時は、あまりにも純粋で平和だったので、かれも自分も、昔からこんなふうだったわけではないし、ふたりが永遠の夏の二匹の動物となったまま変わらないでいることはできないのだ、ということを彼女は忘れてしまっていた。空腹になれば木の実を探し、まぶしく熱い真昼には泳ぎ、静かで穏やかな午後には魚を釣り、黄昏の中、露に濡れた草を踏み分けて帰る。リーは驚いたことに、まったく何の仕事も係累も持っていないらしかった。どうやら義務というものを感じたことのない身の上らしく、家について話が出ることも、ふたりで一緒に過ごす一時のほかに、別様の生活があると言い出すこともなかった。だがそのことは、彼女にはさして奇妙ではなかった。彼女は子供時代に、親と子の永遠のいがみ合いを早くから認識するようにたたき込まれていたし、ほかの子供の場合にも自分とそれほど違っているとは、彼女としては思ってもみなかったからだった。

彼女の祖母はリーに会ったことがなく、今までのところは、おばあさんをかれに会わせてはいけない、という彼女の望みどおりに事態はうまく運んできた。というのもジュリエットはこの老婆が、何らかの形で邪魔をすることを自分の義務と考えるだろうと恐れていたからだ。だから彼女は自分の仕事を決して怠けないように、祖母の心に疑いを起こさせないように用心していた。幼いうちから経験を積まされた子供が身につけるずる賢さを身につけた彼女は、自分とリーとの交際が邪魔だてされずにすんでいるのは、自分より上の権威を持つ人々に露顕していない限りのことなのだ、とすでに悟っていた。祖母を格別に不信の目で見ていたわけではなく、誰もまったく信じていなかったのだ。年長の人が自分たちを表立って非難した時、自分のほうは大丈夫だとしても、リーにはそれをうまく御していく能力はないだろう、とさえ疑っていた。

八月が来て去り、九月も去った。十月と十一月初旬までは、

かれらは飛び込んで泳ぐことができたが、淡い初霜が下りてからは、川の水はまだ温かかったが、大気はぐんぐん冷たくなっていった。かれらは今では真昼だけ泳ぎ、そのあとは一緒に横になって、古い馬用の毛布にくるまり、話したり眠ってまた話したりした。十一月下旬の長雨がすむと冬になったが、それでもまだ湿った茶色の森があったから、かれらはそこで火を焚いて、トウモロコシやサツマ芋を焙った。

とうとう真冬になった。暗い鉄色の夜明け、服を着る間、裸足の彼女は凍える床に爪先を丸め、冷たいストーブに火をおこさねばならない季節だ。少したって、暖気が狭い台所の窓ガラスを曇らせ、皿洗いやバターを作る攪乳の仕事を終えてから、彼女がエプロンの端で窓を拭い、外へ目を凝らすと、家から斜面を下った低地の茶色の縁に小さな人影が、待っているかれの姿が見えるのだった。かれは旧式の単銃身の猟銃を手に入れていて、ふたりは枯れ枝ばかりの綿やトウモロコシの畑でウサギを狙ったり、川の置き水の沼地では鴨に忍び寄って失敗したりした。だがとうとう冬も終わった。

とうとう冬も終わったのだ。風が南向きに変わって雨が降った。川はむっつりと膨れあがり、泥水で冷たかった。それから日が差し、かれらは最初の柳の芽ぶきと最初に帰ってきたコウカンチョウを見つけた。その赤い渡り鳥は、もつれた藪の中で燃える矢のようだった。果樹もいっせいにピンクや白の花を開き、花の群れはまるで芳香の蜂が、灰色の家や汚れた干草の山をうらぶれた巣箱に見立てて集まってきたかのようだった。気まぐれな大理石模様の空の下では、ほっそりした木々が酔ったようにその空にもたれて見え、風が、ずっと遠くの汽車がはるかにゆっくりと過ぎていくような、ヒューッという音をたてて松林の丘を通った。

暖かくなった最初の日、リーはうずうずして彼女を待っていた。彼女のほうも、暗い流し場で皿の音をたてながらそわそわしてはかどらず、もう我慢できない気持ちだった。洗濯物を干しおわってから、彼女が走ってやって来ると、「一番乗りだぞ」とかれははしゃぎ声をあげ、それからふたりは、走る間、服を脱ぎながら川まで競走した。ふたりが飛び込ん

だのは同時だったが、彼女のほうは慌てて靴を脱ぎ捨てるのを忘れていた。氷のような水の衝撃に喘ぎながら、彼女は足踏みをしてそれを脱ぎ、リーはその様子を大袈裟に喜んだ。

「あんた、また白くなったね」と、かれがもう一度飛び込むために木に登っている時彼女は驚いて言った。かれははっとするほど白かった。去年の日焼けは冬の間にふたりのどちらからも消えていて、ふたりはまるで見知らぬ同士のようなよそよそしい気分だった。寒い季節の間、気温が低くなるごとに、彼女は服を次々に重ねて着ていたから、そのもとの体格と比べると、今彼女はひどく痩せて見えた。しかも彼女は十三歳になり、身体の釣り合いの悪い年齢に達していたので、リーの滑らかな象牙色の均整のとれた身体に並ぶと、彼女の痩せた腕や肩や小さくて骨張った腰などはほとんど醜いように見えるのだった。

水があまりにも冷たかったので、一、二度飛び込んだあとは震えながら水から出て、身体がまた温かくなるまで森を走り抜ける競走をした。それから服を着て、リーは二本の釣り糸と、イトミミズが絡まりあって入っているブリキ缶を取り出した。「明日はもっとあったかくなるさ」とかれは彼女を元気づけた。

明日ではなく、数週間たってから水は温み、日が長くなるにつれてふたりのよそよそしい肌の白さもまた消えて、やがてもとどおりに褐色になった。こうしてまた一年が過ぎていった。

Ⅳ

ふたりは並んで横たわり、高く明るい十月の真昼の日の下で、馬用の毛布にくるまってうたた寝したり目覚めたりしていた。すっかり快適というよりは、ふたりの若い身体から生ずる熱でむしろ暖かすぎるほどだった。その熱と、毛布のむず痒いような目の粗さのせいで、ジュリエットは落ち着かなかった。寝返りをうって手足の位置を変え、また寝返りをうった。日ざしはゆっくりと何度もたたくようにかれらの顔

に当たり、まぶしくて目を開けていられなかった。
「リー」と彼女はとうとう言った。
「ああ？」と夢うつつに。
「リー、あんた、大人になったらどうするつもりなの？」
「どうもしないよ」
「何にも？　何にもしないで、どうやって暮らしていくつもり？」
「さあね」
彼女は肘をついて上体を起こした。リーのくしゃくしゃの頭は熱い砂の中に半分埋まっていた。彼女はリーを揺すった。
「リー、起きて」
黒く日に焼けた顔の中で見開いた目は、木を燃やした灰の色だった。リーは急いでまた目を閉じながら、腕を曲げて目の上を覆った。「えい、くそっ、何だって大きくなった時のことなんか心配するんだよ。おれは大きくなんかなりたくねえよ。おれはこのままでいたほうがいいよ。泳いで、猟をして、釣りをしてさ。このほうが、大人になって畑を耕したり、綿だのトウモロコシだの刈ったりするより、ずうっといいじゃねえか」
「でも、いつまでもこのままじゃいられないんだよ。いつかは大きくなって働かなくちゃ」
「じゃあ、大きくなるまで、そんなことを心配するのは止めておこうぜ」
彼女はまた寝ころんで目を閉じた。明るい太陽の斑点が、瞼の前や後ろで狂ったように赤く躍った。だが、彼女は納得していなかった。彼女の女らしい執拗さは、そう簡単に鎮まらなかった。寿命をもって変化してゆく我が身を予感して、彼女は移りゆく年月のように、ぼんやりと不安がり、悲しんでいたし、不変のものなど何一つないのだと、例外として不変のものは、変化があることそれ自体だけだと、悟ってきてもいたのだった。強烈な日ざしの華やぎの中で、ふたりは黙って身体を感じあっていたが、やがて音が聞こえてジュリエットは目を開けた。
滑稽にも逆さまになって彼女の真上に立っていたのは祖母

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo